

## 相談事例における教育相談活動のあり方について の検討 (2)

藤 土 圭 三

### A Study of the Counseling Relationships on Cases (2)

Keisō Fujito

#### 問 題

平成5年4月から平成7年12月までの担当事例については、「相談事例における教育相談活動のあり方についての検討(1)」で、17事例を対象として検討した。

本研究では、平成6年1月から平成9年4月までに対応した事例から代表的な事例について、相談関係のあり方を分析し、今後の相談活動のあり方について検討することを目的とする。

分析資料：3事例「思春期危機の事例・臭いに悩む事例・心身症児の母親の事例」

#### 面接経過とその結果

##### 事例1：思春期危機の女子青年

#1：10/22：クライアントと保護者来談

中学校頃から不登校が始まる。始めは教育相談機関の指導を受けたが、効果がなかったため、精神科医師にかかり薬とカウンセリングで治療した。学校に行くようになったので、治療は終了した。しかし、再度不登校になったので、今度は、公立病院精神科にかかった。薬中心で治療が再開・継続された。はかばかしい成果が見えないので、保護者が不安となり、来談した。家族は両親と同胞2人の4人家族である。

#2：10/28：クライアントと保護者来談

薬が変わったので、気分が楽と言う。何も話すことがないといいながら、父親の勤めの話をする。

#3：11/2：クライアントと保護者来談

先日は状態が悪かったが、今日は落ち着いている。薬の効果のためか、けだるい感じがする。絵を描いて来る。繊細な感じの絵で、草花の絵。淡い色で、クライアントの心情がよく出ている。絵そのものは、優しさと、細やかさ一杯の出来ばえであった。

#4：11/14：クライアントと保護者来談

機嫌が悪く、不安定であった。薬のためか、反応が鈍い。テンポが遅い。絵の話を持ちかけたが、反応がなかった。

#5：11/25：クライアントと保護者来談

落ち着いているが、何もしない。医師が家事を手伝うようにしなさいと言うが、やる気が出ないと言う。

# 6 : 12/2 : クライアントと保護者来談

変化なし。薬を飲むとすぐに眠気がする。家事を手伝うこともあるが、まだまだと言う感じ。

# 7 : 12/15 : クライアントと保護者来談

アルバイトを始めた。商品を配達する仕事。久方ぶりの積極的行動で、保護者も喜んでいる。

# 8 : 1/12 : クライアントと保護者来談

日常生活についての話。朝、何時に起きますか、ご飯を食べましたか、お昼までは何をしましたか。お昼ご飯は何を食べましたか、昼からはどんなことをされましたか、夜のご飯はどうですか。夕食後はどうされましたかと言うようなことを聞いて、日常生活を理解すると共に、日常生活の習慣化について相談する。

# 9 : 1/20 : クライアントと保護者来談

面接を始めて、効果があるのか、最近、攻撃性が少なくなり、平穏な生活が続くと言う。〈畑仕事をする気持ちはないですか〉と聞くに、クライアントは保護者の方を向いて、どう言ったらよいかと言うような表情をする。保護者が、一緒に畑で野菜を作りましょうと言うと、クライアントはうなずく。定期的に来談することで、リズムができるためか、攻撃性が少なくなったと言う。

# 10 : 1/28 : クライアントと保護者来談

落ち着いている。楽器の練習を始めた。縄飛びもしている。散歩にできるようになった。成人式にも参加した。多くの知人がいた。クライアントに取って、成人式への参加は予想もできないことであった。保護者も喜んでいる。

# 11 : 2/9 : クライアントと保護者来談

不安定となる。何か押さえつけられた感じがする。

# 12 : 2/24 : クライアントと保護者来談

今日は精神科にも行って来た。手が浮く感じがすると言うと、薬を変えてくれた。今回は電話で予約して、来談したいと希望した。その後の電話で、しばらく家庭で生活を続けて見る。面接は終わりたいとの申し出があり、面接を終了した。

本事例は中学校時代に発病し、精神科医師にかかりながらの面接契約となった。本事例の場合、クライアントの課題が課題であるから、その改善ははかばかしくなく、医師の指導で、長期の療養が必要だと言われていても、はっきりした改善の見られない状況の中で、保護者に迷いが生じる。このような時に、精神科治療と並行的に心理臨床家が援助を求められることがある。既に精神科医師に治療的援助を受けながらの面接申し込みとなるので、その対応については幾つか留意事項がある。

(1) 本事例のクライアントの場合、保護者から聴取できる精神科医師の診断名は、あくまでも患者とその家族用であり、医師自身の診断は別にある場合が多い。

本事例のクライアントの場合、医師は患者とその家族に対し、軽度の精神的不適応と伝えられる場合が多い。これは当然の対応で、患者は、医師の言葉によって元気づけられて、治療動機を高く保つことができる。しかし、患者の通院が長期間になると、患者自身も不安になるが、保護者がより不安定となり、他の医療機関や相談機関を捜し求めたり、類似指導機関を捜したりする。本事例のクライアントと保護者は知り合いを通して、心理カウンセラーに面接を求めてきた。結果、クライアントに取っては二股治療と言うことになる。この場合、医師の治療効果を阻害するような心理的対応が行われてはならない。可能ならば、主治医と連絡をとりながら、協力的な治療を実施する必要がある。しかし事例によっては、主治医との協力を必要としない場合もある。本事例は後者の見本事例である。本事例のクライアントの場合には、クライ

エントと保護者からの情報によると、精神薬中心の治療が行われていると言うので、心理面接では、クライアントとその保護者の不安や心配を傾聴し、クライアントとその保護者の心を癒すことに専念する。特に保護者の不安・心配に対しては積極的に傾聴し、共感を重ねることで、保護者の安定をはかる。このような働きかけはクライアントの課題解決に間接的に貢献することになる。

(2) 本事例の場合、クライアントへの対応は慎重にし、洞察を進める働きかけよりも、気持ちや心配を受容することで、クライアントの安定を側面的に援助する。クライアントの心を癒すことは、クライアントの課題が精神的な問題の場合だけでなく、身体的問題の場合にも必要なことである。ここでは、心理カウンセラーの重要な機能として、クライアントが自己の問題を解決すべく努力する過程における心の癒しである。

(3) 本事例の場合はクライアントと保護者とは同席面接であった。約6か月、12回にわたる面接では、はっきりした改善は示されなかったが、落ち着いた状況の中で、面接終了の申し出を受けて、契約解除となった。

## 事例2：臭いが気になる女子青年

### #1：10/7：クライアント来談

体の匂いが気にかかる。確かにそうだと思う感じがする。しかし確かめる勇気がない。確かめてもない。4回生で、目下就職活動中である。祖父が最近死亡した。両親に同胞2人、祖母とクライアント以外の家族3人は職業を持っている。体の臭いが気になりだしたのは、高校時代に友人から臭いを指摘されて以来からだと言う。「貴方は香水を付けているの？」と友人から言われたことがきっかけになったと言う。クライアントはアルバイトをしているが、お客が臭うのではないかと心配する。特に近くにいる人が、クシャミをしたり、鼻に手をやったりすると、臭いがしているのだと思うと言う。

### #2：10/17：クライアント来談

〈今日はどうですか？〉この間、ここで話しをしたら、気持ちが楽になった。〈それはよかったですね〉他人に打ち明けた方が気持ちが楽になりそうなので、信頼出来る人にも話してみようかと思う。〈それは、大切なことですね、ここで話ただけでも、少しは効果がありそうですね〉信頼出来る方に打ち明けることができれば、効果は大きいかも知れませんね〉そうですね。この間、保健室に行って、保健の先生に相談したら「貴方の思い込みだ」と言われ、納得できない。やはり原因があるはずだと言う。自分の思い込みだけで、この様なことが起きるはずがない。〈貴方は、保健の先生の言う、貴方の思い込みと言うことが、納得できないのですね〉そうです。

### #3：10/25：クライアント遅刻して来談

〈どうですか？〉変わりありません 〈そうですか〉同じ状況です 〈そうですか、変化なしと言うことは、悪くはないと言うことですね〉そうですね。そう言われれば、中学生の時に男子生徒と水泳に行った時も、男子生徒がシュノーケルを付けて泳がねばと言った時、自分の臭いを感じていると思ったことがあると言う。高校の時、男子の友人が貴方の臭いは貴方の父の臭いに似ていると言ったことがあると言う。現在、親しい友人がいるが、彼は臭いがするとは言わない。

〈親しい友人(男性)が臭いを感じないと言うのはいいことですね〉そうですね。

### #4：11/15：クライアント定刻来談

ふっくらとして、落ち着いている感じ 〈今日はどうですか、話したいことから、どうぞ〉毎

日が多忙なので、臭いが気にならなかったですと言う。指導教官から卒業研究についてコメントが来た。訂正したりしていたので、多忙だった。多忙が幸いしたのか、臭いが気にならない生活ができた。ここに来て話をすると不思議に臭いのことが気にならなくなると言う。

# 5 : 11/22 : クライアント定刻来談

ここに来るようになって、気持ちが楽になり、臭いが気にならなくなった〈それはよかったですね〉はい〈何で臭いが気にならなくなったと思いますか?〉多分、友人との関係がすっきりしたからだだと思います〈なるほど〉そうです。

# 6 : 12/6 : クライアント10分遅れて来談

研究論文の作成で忙しい。就職先が決まり、安心する。顔色もよくなり、明るい感じとなる。

体の臭いが気になると言う訴えは青年期の若者には比較的多く、精神的不適応と考えられやすい。しかし、本事例は6回の面接で、一応の軽快を見た。ここでのクライアントの問題は、体の臭いと言うよりも交友関係の問題であった。友人問題は全面的に解決したと言うより、先が見えてきたと言う状況にある。クライアントは就職も決まり、卒業のための研究論文もパスし、卒業した。

本事例は、卒業期を迎えた青年が、多忙で、次々と押し寄せる課題に対して、これを乗り越えるために困窮し、適当な援助者として、心理カウンセラーを求めて来談したのではあるまいか。心理カウンセラーの実感としては、見る間に変化したと言う印象である。臭いが気になると言う訴えは、高校生時代の経験が引き金となって、臭いを気にすると言う症状を示し、保健室の保健婦の指導も受けたが、納得できず、心理カウンセラーに相談を求めてきた。臭いが気になると言う訴えは、時として重篤な精神的問題に移行する場合もあるので、慎重な対応を求められるが、本事例の場合には、心理的不適合水準に留まり、面接により軽快した。

### 事例3：心身症状に困る児童の保護者

# 1 : 6/3 : クライアントとその母親来談

クライアントが心身症状を示している。クライアントは別のカウンセラーが治療に当たる。クライアントの保護者の課題に対応する。クライアントの心身症状は小学校中学年のころから始まったとのこと。父は生立ちの事情もあって家庭を大切にしている気持ちが強い。しかし、同時に子どもに対する期待が強く、クライアントの成長にも強い関心を示し、一生懸命に教えてきた。国語が上手である。クライアントが勉強が出来ないことは許されない。出来るのが当然と言う感じである。同胞は二人。

父親は真面目な人で、完全欲の強い性格で、怠り心は絶対に許せないと言う感じである。母親の両親は健在だが、父親の場合は父のみ健在と言う。

クライアントは身長は普通だが、肥満気味である。母親の言では幼い感じとのこと。

# 2 : 6/20 : クライアントと母親来談

母親との面接を契約する。クライアントは遊戯療法を受けるために別室。母親と面談を始める。面接のためのオリエンテーションの後で、面接を続ける。学校以外に塾は3つほど行かせている。英語、バレエ、ピアノとのこと。

〈自宅での学習はどうですか?〉今年の初めまでは、父親が無理矢理にやらせていたが、症状を見るようになって、少し手控えている。午後11時頃までは勉強させていた。学習用プリントを沢山持って帰って、やらせていたこともあった。弟は上手くすり抜けているが、クライアントは泣きながらも、頑張っていた。私(妻)も基本的には夫の考えに近いものがあり、

黙って見過ごしていたし、時には協力した。両親は気づいたことはすぐにやると言うことを掟にしていると言う。夫は2代目、私は3代目の同一職業で、私の祖父も父親もきちっとした、几帳面な人とのこと。義父も同じ傾向があり、家中の大人はほぼ同じ行動傾向があり、几帳面で、きちっとやらないと気がすまない傾向が家族文化となっている。

# 3 : 6/26 : クライアントと母親来談

5歳時に競争事態の好きな先生の指導を受けて、クライアントに強い緊張を与えた。しかも、当時はその指導法に対し両親も賛同していた。更に祖父が理想的教育を求めたので、それに振り回されて、クライアントを育てたとのこと。母乳で育て、しかも母乳量も正確に計るために、精巧な秤を買って、何グラム飲んだかを調べて記録したりしたとのこと。マニュアル通りにならないと気がすまない傾向があり、理想通りに行くようにしなくてはならないと信じていた。クライアントは小学校中学年ころから、心身症状が始まったが、暫くすると、自然に治ったので、安心した。

# 4 : 7/10 : クライアントと母親来談

クライアントが頭髪を切って、短くしている。誰に切ってもらったのと聞くと、父親に切ってもらったと言う。クライアントは元気がよく、はつらつとしている。来談を期待している感じとのこと。

# 5 : 7/17 : クライアントと母親来談

犬の名前をコロにした。ころんと転ぶからだと言う。

特に変化なし、元気で生活している。しかし、先日の運動競技で、監督の指導に一人際だつて緊張している感じがしたと言う。

夏休み中で、家族で旅行をするとのこと。自動車で関東地方に行く。

# 6 : 8/8 : クライアントと母親来談

一学期の成績を見せてもらう。3泊4日で旅をしたとのこと。クライアントは積極的に、元気に生活をしている。

# 7 : 8/22 : クライアントと母親来談

クライアントは企業の主催する子供だけの旅行に参加し、友人も出来て、喜んでいると言う。子供だけの旅行に参加すればよいくらいの気持ちで、子供に問いかけたら積極的に、参加したいと、意欲的だった。

クライアントが生まれた時には、育児が不安でたまらず、乳を飲ます時にも、テレビか音楽を聞いたり見ながらでないと、不安が募って仕方がなかったと言う。

そのためにも、このように育てようと決めて、その通りるすることに必死だったと言う。理想通りに行かないと、落ち着かず、何としても理想通りになるように努力した。特にクライアントを養育する時には夫は多忙で、何時も夜遅くまで職場から帰らぬこともあり、不安で、寂しい思いをしたとのこと。

# 8 : 8/22 : クライアントと母親来談

子供2人は母親の両親のところに行っていた。今日は夫と共に子供を引き取りに行き、その帰りに来談した。夫と弟は車の中で待っていると言う。2日ほど夫婦だけで、楽しい生活をした。新婚生活を味わった。来月からは、学校が始まる。それに、宿題は全部終わっていないのに、遊んでいる子供(クライアント)を見ると、ドリルをさせようと言う気持ちになり、口やかましくなる。

クライアントの遊ぶのを見ると、イライラして、つい勉強するようにと言ったところ、クライアントに心身症状が再現した。驚くと共に子育ての難しさを感じたと言う。ストレスをかけ

たら、直ちに心身症状が出て、ストレスをはずしたら、症状が軽減した。不思議さを感じながらも安心した。敏感な反応に驚いている。

# 9：9/4：クライアントと母親来談

夫の性格、自分の性格について語る。

# 10：9/12：クライアントと父親来談

今日は父親がクライアントを連れてくる。挨拶を交わす。どうですか。何時もお世話になります。大学の駐車場までは時々来ていたのですが、今日は妻にかわって、私が来談しますと言う。妻からいろいろ聞かされて、反省している。心に思い当たるところが幾つもあります。自分も真面目ですし、大学の4年間、一日も欠席しないで、全部の講義や実習に出席したとのこと。これが普通と思っていたと言う。私の父親も真面目な人で、日曜以外は働き詰めで、日曜日には農業をこなしていた。働かないでいる父を見たことがないと言う。何をすることも、常に教育的配慮に徹していたと言う。

# 11：9/18：クライアントと母親来談

この間、夫が面接に来て、大変、喜んでいた。

# 12：9/25：クライアントと母親来談

本をたくさん読み、本に書いてあることを信じて、その通りにすれば、素晴らしい子供ができる信じて、その通りに育てようとしてきた。例えば母子関係が大切と書いてあるので、出産直後から、母子は共にあるべきとして、ナースにたのんで、新生児をベッドにつれて来てもらって一緒に生活した。絶対に母乳で育てると頑張った。結果、子供が栄養不足気味になり、医師の指導で人工乳を加えるようにしたとのこと。更に産休、育休の1年間は殆ど家から外に出るようなことはなく、二人で家で静かに生活したと言う。何故と聞くと、外は細菌やごみが多く子供の健康にとって良くないと信じていたからだと言う。どうしても外出しなくてはならない時には保健所に電話して伺いを立ててから外出したと言う。私の性格は完璧にしないと気が済まない性格だからと言う。この性格は私の母親譲りのもので、母親は私以上に厳しい性格だと言う。それに母親の家系には感情的で、激しい性格の人が多く、特に母の姉の娘は、激しい性格だと言う。

# 13：10/31：クライアントと母親来談。

〈最近はどうですか?〉元気に学校に通学しているし、友達も作るし、心配することはないと言う。クライアントはパートのおばさんと仲良しになり、冬休みには、おばさんの家の子供と遊ぶことにしている。

# 14：11/6：クライアントと母親来談。

〈最近どうですか?〉との質問に、母親は悪い顔となり、先日、父親がクライアントをひどく叱りました。ちょっとしたことで険しい関係となりました。

# 15：11/14：クライアントと母親来談。

〈どうですか?〉変化なしです。友人と仲良く遊んでいます。2人の親友があり、家に来たり行ったりしています。

# 16：11/21：クライアントと母親来談。

自分がいらいらしたり、感情的になると、クライアントに心身症状が出てくる。母親の気持ちがおおらかでいると、クライアントの心身症状は落ち着くと言う。母親の経験では、自分の気持ちの変化がクライアントの心身症状にすぐに反映する。立ち居振る舞いの整った、言葉使いのよい、知的な家庭だけど、どこかに緊張感があって、クライアントにとって無意識のストレスとなるのだろうか。

#17: 11/27: クライアントと母親来談。

特に変化はない。順調に通学しているし、元気である。最近では症状も軽くなっている。元気がよいし、うれしい。上司の子どもさんが登校拒否で悩んでいるのを聞いて、人のことがよくわかり、自分に振り返り、反省している。人のことはよく見える。上司は完全主義の人で、完璧でなくてはならない。上司の夫も管理職で、単身赴任中とのこと。すごく厳格な人で、子どもさんが登校拒否になっているのだが、どうしてあげることもできない。

#18: 11/27: クライアントと母親来談

クライアントは元気で学校にいつている。何も言うことはない。自分達(両親)も前ほどキリキリしなくなり、子どもも安心して、すくすくと成長している。

#19: 12/11: クライアントと母親来談

クライアントが先日来、肺炎にかかり、しんどかった。まだはっきり治りきらず、今日は顔色がよくない。

#20: 12/18: クライアントと母親来談

最近、クライアントが反抗的で、口答えをするようになった。攻撃性ができると聞いていたので、安心して引き受けることができた。夫も納得して受け入れてくれている。

#21: 12/26: クライアントと母親来談

相変わらずです。元気に生活しています。最近、身長も高くなり大きくなりだした。ここに来談するようになって、気持ちにゆとりができて、本当によかったと思う。他のクリニックではこんなに上手くは行かなかったと思うと言う。

#22: 1/8: クライアントと母親来談

最近、自分たちの子育てが間違っていたことがよく分かった。夫も反省してくれて、うれしいし、夫が大きく変わった。一番変わったのは、子どもに対して管理者として当たらないで、父親として当たるようになった。

#23: 2/5: クライアントと母親来談

クライアントが、最近ますます成長してきた。父親がクライアントと共に風呂に入らなくなった。

夫婦で話し合っているのだが、最近では気持ちが楽になったと言う。

#24: 2/19: クライアントと両親来談

両親で来談する。親子4人の来談。親子でスキーに行くのを楽しみにしている。クライアントが反抗的で、口答えが激しいと言う。

#25: 3/5: クライアントと母親来談

最近では、すっかり落ち着いている。元気よく友人と交流している。両親も今回のことで、子育てのことを考え直したと言う。こんなことになろうとは自分からは思いもしなかったが、自分に来るとは晴天の霹靂だったと言う。

〈60パーセントくらいの回復とみてほしい。クライアントが思春期にあるので、自然に成長することを期待する〉と言う。これで面接を終わる。

本事例は、クライアントに対して、遊戯療法を実施している間に、並行的に実施した保護者へのカウンセリング過程である。保護者のクライアントへの養育態度がどのようなものであったかを検討し、何がクライアントの症状発生のための背景であったかを分析した。保護者の養育態度の変容が、クライアントの症状改善に影響すると言う前提で、カウンセリングを実施した。クライアントは25回の遊戯療法の結果、症状の改善を見た。並行的に実施した保護者へのカウンセリングの結果、保護者自身のクライアントに対する養育方法に大きな変化が見られた。

特に、カウンセリングを受けるまでは両親の信念となっていた知的、理論的、向上志向的養育方法が、変更され、習慣的、情緒的養育方法へと変化した。

## 考 察

本研究では、教育相談活動において特徴ある3事例を取り上げて検討した。ここに取り上げた3事例は代表的対応事例と推察できるものである。

第一事例は、「思春期危機」と呼ばれる事例である。クライアントの課題からも推察されるように、精神医療的援助の必要な事例である。精神医療的援助は主として薬物中心の治療であったが、治療が長期に及ぶので、保護者が更なる援助を求めて、医療以外の相談機関を求めて来談する場合である。医療との平行的援助ということになる。すでに述べたように幾つかの留意事項がある。医師（主治医）と連絡を取りながらの援助が効果的である。

第二事例は青年期の若者に多い症状であり、青年期の来談者によく遭遇する。しかも「臭いが気になる」と言う訴えは、重篤な精神的課題を予想される場合もあり、注意深い対応が必要である。しかし、本事例の場合は、最初の訴えは「臭いが気になる、人に臭っている気がする」と言うことであったが、面接が進行するに連れて、臭いの問題から交友関係の問題となり、友人関係の問題解決の糸口がつかめるに連れて、臭いについての訴えが少なくなったし、就職も決まるなどの将来への見込みが立つにつれて、臭いについての訴えが少なくなり、自然に消滅した。第三事例は、子どもの課題についての相談活動を進めるためには課題のあるクライアント自身の心理療法（本事例の場合は遊戯療法）と並行して保護者（主として母親）へのカウンセリングが必要な事例である。一種の家族療法的な接近法と言えよう。クライアントの発達に取って、陰に陽に大きく影響する母親のカウンセリングは大切なことである。しかし、保護者である母親はクライアントに取っては保護者であるからクライアントの発達と成長に治療者が考えるほどに大きな影響があるとは思ってたくない心情があり、クライアントだけ援助をしてほしいと言う気持ちがある。ここで大切なことは保護者の「別でありたい」と言う気持ちを大切にしながら、あるいは関係はないと言いつつながらの時点でカウンセリング関係を形成し、社会的な交流を通しての治療的援助が必要である。具体的にはクライアントの課題解決のための対策的話し合いを継続しながら、保護者である母親の心情の変化を進めることで、クライアントの成長・発達のための援助促進的環境となることを面接目標とする。

## 参 考 文 献

- 奥田 治他 1991 臨床心理士と精神科医との連携  
臨床心理事例研究 京都大学教育学部心理教育相談室紀要 18 PP 2-21
- 鐘幹八郎他 1992 特集：ケースカンファレンス—牛島先生を迎えて—  
臨床心理事例研究 京都大学教育学部心理教育相談室紀要 19 PP 2-36
- 李 敏子 1990 不安神経症の女性との面接  
臨床心理事例研究 京都大学教育学部心理教育相談室紀要 17 PP 79-89
- 樋口啓子 1994 長男の障害 (MBD) を認め、自立へと動き始めた母親の面接過程  
心理教育相談研究 広島大学教育学部心理教育相談室紀要 11 PP 113-123

—平成9年10月1日 受理—